

[研究論文]

大学における専門科目としての演劇教育とジェンダー —先行研究分析とダンス教育におけるジェンダー研究との比較—

Theatre Education and Gender in Specialised Subjects in the University

—Leading Research Analyses and Comparison of Research in Gender and
Dance Education—

松村悠実子

Yumiko Matsumura

〈抄 録〉

拙稿(松村、2014)で、大学における専門実技科目としての「演技」の授業の際、女子学生達は「かわいい」という「キャラ」を保持しながら、同時に演劇の「キャラクター」を演じるという言わば演技の二重構造が見られるということを明らかにした。引き続き「演技」の教育におけるジェンダーの影響を考えるにあたり、今回は先行研究分析を主軸として、このテーマに取り組む。まずはじめに、これまでの演劇とジェンダー及びフェミニズムの関係、また演劇教育におけるジェンダーについての研究を概観する。次に、同じく上演芸術であるダンスが、教育の分野においてジェンダー的視点によってどのような研究がなされてきたか、演劇のそれと共に比較検討する。まとめとして今後大学の専門実技として演技を指導する際、ジェンダーをどのように考えていくべきかを提示する。

キーワード：演劇、演技、ダンス、大学、教育、ジェンダー、フェミニズム

Abstract

Matsumura (2014) has found that the female students in her acting class at university are maintaining “gender kyara” at the same time as they act the character role in the play in what can be described as a “dual-acting system.”

In order to consider gender in acting education, this essay will focus on how the relationship between theatre and gender/feminism has been researched. Then, we will move on to see how in theatre education gender has been researched. To compare, what kind of research has been done about dance and gender in education will also be examined. To conclude, having what has been found so far in mind, there will be a discussion on how we should consider the issue of gender within acting classes at the university level.

Keywords: theatre, acting, dance, university, education, gender, feminism

はじめに

2014年の拙稿「演技の授業におけるジェンダーの影響を考える—日常の「かわいい」キャラと演劇のキャラクターという演技の二重構造についての考察—」では、大学で演劇を専門として学ぶ学生対象の専門実技科目として扱われる「演技」の授業において、学生がバックグラウンドとして持つジェンダー意識に関して考察した。その結果「女子学生達は日常における『かわいい』という女性性を示す『キャラ』を保持しながら演技の授業に参加し、更に演劇の登場人物（キャラクター）を演じているという、そこには言わば演技の二重構造が存在する」という結論に至った。

今回の研究では、日本の大学における専門としての演劇教育において、更にその中でも「演技」という実技科目の中でジェンダーは今までどのように研究されてきたのか、又はそもそもフェミニズムやジェンダーの視点から大学での専門としての演劇教育についてこれまで研究がされてきたのかということに関して、調査し考察を加える。更に同じ身体を使った表現芸術（舞台芸術）であり、大学において実技と共に専門的研究がなされ、専門実技科目として存在している「ダンス／舞踊」の教育におけるジェンダーの研究と比較検討していく。

1. 研究に至った経緯

これまでの筆者の研究では、現代日本の学校教育をジェンダーの視点から考察したものや、「キャラ」¹⁾といった視点を先行研究に位置づけ、演技の授業に臨む際の学生のジェンダーに関するバックグラウンドとして、入学以前の教育（例：隠れたカリキュラム²⁾、体育の授業における男女差など³⁾）や友人関係の中での隠れたルール⁴⁾が影響しているとの結論に至った。その結果、大学において演技を実技専門科目として指導する際に、このようなジェンダーの影響をどう授業に反映していけばよいのかという点を考える必要性が出てきた。そこで現在、大学における実技科目「演技」においてジェンダー的視点からはどのような取り組みが行われているのかを調査することとした。問題の発端はそこだが、そこに到達する前に、まずは大分類であるジェンダー／フェミニズムと演劇の研究、そして大学における演劇教育についての調査を行うこととする。更には既にダンスの分野では、中学校でのダンスの男女必修化の影響からジェンダーと教育についての先行研究が近年多く存在しているので、それらの分析を比較対象として行う。

論文内での用語についての凡例

筆者の研究対象は演技の授業に参加している学生の「ジェンダー」と「演技」の関わり合いであり、いわゆるフェミニズムという視点とは異なるのだが、先行研究を調査・考察するには「フェミニズム」も含めて考察する必要がある。その理由として、ジェンダーという概念がフェミニズム研究と密接にあること、また今回取り上げている演劇において、「ジェンダー」というキーワード以前に「フェミニズム」の視点からの考察や研究、更には作品創作⁵⁾が行われていること、そして先行研究の中でも「ジェンダー」と「フェミニズム」の両方のキーワードを使用しながら議論がなされているからである。そのことを考慮し、明確に「ジェンダー」と「フェミニズム」が分かれて使用されている場合はそれぞれ単体で、両方の意味合いを含む場合は「ジェンダー／フェミニズム」と併記する。

2. 先行研究概観1 (演劇・大学教育・ジェンダー/フェミニズム)

2.1 国立情報学研究所・論文情報ナビゲーターシステム「CiNii Articles」でのキーワード検索

まず、これまで国内でどのような先行研究があるのか、国立情報学研究所・論文情報ナビゲーターシステム「CiNii Articles」で、「タイトル」の欄に、以下のキーワード(表1)を単体・又は本研究に見合った組み合わせで検索を行った⁶⁾。尚、検索結果は学術論文だけでなく、雑誌の記事やコラムなども含まれた数であったこと、また違うキーワードで重複して出現したもの、更にタイトルではなく、掲載誌名や著者の所属機関名がキーワードとしてヒットし、検出されたものも見られたが参考のためそのまま記す。検索結果として出てきた数は以下の表の通りである。(表2)

表1 キーワード一覧

ジェンダー	フェミニズム	演劇
演技	大学	高等教育

表2 キーワード検索結果 (2015.12.7調べ)

	キーワード 組み合わせ			表示された数
	キーワード①	キーワード②	キーワード③	
A	演劇			14872
B	演技			1542
C	演劇	フェミニズム		11
D	演技	フェミニズム		0
E	演劇	ジェンダー		34
F	演技	ジェンダー		4
G	大学	演劇		205
H	高等教育	演劇		6
I	演劇	演技		120
J	演劇	演技	ジェンダー	1
K	大学	演劇	ジェンダー	0
L	大学	演技	ジェンダー	0

2.2 演技とジェンダー

表2でキーワード「演技」+「ジェンダー」で表示された4件(F)の中で、舞台芸術「演劇」における「演技」と「ジェンダー」を論じたものは、前述した筆者の論文(松村、2014)だけであった。また、演劇・演技・ジェンダーの三つで検索された1件(J)も、筆者のもの(松村、2014)である。

今回のこのCiNii Articlesでの検索結果のみを先行研究のまとめとするのには弱点は二点ある。一点はこの検索結果のみが国内の先行研究結果と結論付けるのは尚早であること、また二点目は、この度「タイトル」の項目でのキーワード検索結果なので、データベース内でもタイトルに、私が選出したキーワードを使用していない関連論文ないし記事が埋もれている可能性は十分考えられることであ

る。だが、「演劇」だけのキーワード検索の数 (A) との比較からすると、「演劇」を論じているものの中で、「演技」と「ジェンダー」の視点から見たもの (J) の数の明らかな違いは、演劇研究の中でまだジェンダーと演技の組み合わせでの研究が比較的新しい視点であることへの一目瞭然の示唆と考えられる。

2.3 演劇とフェミニズム及びジェンダー

では、「演技」におけるジェンダーから視点を広げ「演劇」と「フェミニズム」、あるいは「ジェンダー」のキーワードでの研究 (C) と (E) はどうであろうか。検索結果では「演劇」と「フェミニズム」で表示された (C) の11件のうち、4件は「演劇」と「ジェンダー」(E) の34件の中で重複していたので、「演劇」と「フェミニズム」、「演劇」と「ジェンダー」の検索結果の合計は41件 (そのうち、1件は松村 (2014) であった)、またその中での1件が他の数個の論文の総集だったので、この総集分1件を取った、計40件の研究内容を筆者が以下のカテゴリーを作成し、分類してみた。結果は以下となる (表3)。

表3 研究内容のカテゴリー

カテゴリー	数
海外におけるフェミニズム又はジェンダーに関しての総論・概念・概論/女性演劇人・作品の分析	32
国内におけるフェミニズム又はジェンダーに関しての総論・概念・概論/女性演劇人・作品の分析	5
日本と海外の作品についての分析	1
シンポジウム等の参加報告	2

単純に数字だけ見ると、演劇全体の検索結果 (A) 14872件からすると、この検索結果数 (40件) は、演劇の研究において、ジェンダー/フェミニズムの観点からの研究は非常に少ないということを示している。これは、この中で検索された与那覇 (2014) の「フェミニズム論から見る沖縄演劇—組踊『忠孝婦人』を中心に—」の中で「日本や沖縄においてフェミニズム論の観点から総合 (歴史) 的に演劇 (あるいはパフォーミング・アーツ) を論じた著書はない。池内靖子著『フェミニズムと現代演劇—英米女性劇作家論』などの著書はあるが、日本の伝統演劇から現代に至る通史はフェミニズム理論でまだ論じられていない。」⁷⁾と言及されているように、2.2で見たように演劇の演技に特化した分野だけでなく、「演劇」という舞台芸術に関して国内ではまだフェミニズムやジェンダーといった視点で多く語られていない現状が見て取れる。また表3が示す通り、その中でも日本国内の演劇に関して論じているものより、海外に焦点を当てたものが多いが、日本国内でも演劇におけるフェミニズムやジェンダーとの関連は取り上げられており、例としては演劇雑誌「テアトロ」は1989年に「小特集 フェミニズム劇の現在」という特集を組んでいるし、また「フェミニズム」「ジェンダー」とタイトルには銘打っていないものでも演劇と女性という視点から考察する試みは行われており、日本演劇学会発行の『演劇学論集紀要43』では、「特集 日本の女性劇作家」を組み、女性演劇人や作品に焦点を当てたものも存在する。この中にはフェミニズムの視点で論じられているものもある。また、森川には1987年の「演劇」と「フェミニズム批評」についての論を始めとして、演劇とフェミニズム及びジェンダーという視点で主に戯曲やその作家について考察しているものがある。また、演劇の中でも「女優」に焦点を当てた研究、特に女優が誕生した頃の考察には、男性社会であった演劇に女性が参入し

てくるものであった故、加野（1999）など、必然的にフェミニズム的視点やジェンダーに焦点を当てて論じているものも多い。海外においては、Anan（2012）が、日本の演劇に関してフェミニズムの視点から研究し発表しているものがある⁸⁾。Anan（2016）はまたGirl's Aestheticsという視点から日本におけるパフォーマンス（演劇に限らず）を分析しており、フェミニズムやジェンダーといったキーワードと密に関係のある研究となっている。この中でAnanは70年代後半から80年代にかけてメジャーな女性劇作家や、女性劇団主宰者が登場したのを指摘、また作品をジェンダー/フェミニズム的視点から分析しているが、彼女らと女性運動家達との接点はなかったと指摘している⁹⁾。本論から逸れるので、日本の女性演劇人に関しては割愛するが、表3にも表れている通り、日本国内における、「演劇」をジェンダー/フェミニズム的視点から考察することや、女性演劇人研究やフェミニズムやジェンダー視点からの作品考察はまだ研究分野としてマイナーといえるだろう。しかしながら柴山（1997）の研究は、アメリカにおけるフェミニズムとレズビアン演劇について述べているが、同時に演劇をどうフェミニズムやジェンダーの視点で捉えるべきなのか論じており、「日本国内の演劇に関して」述べていなくても、日本においても演劇とフェミニズムの研究は行われていることは明記しておく。

補足として、CiNii Articlesは日本における論文や記事を検索できるもので、海外のものは含まれない。しかし、海外では、日本に先駆けて、演劇をフェミニズムやジェンダーの視点から分析している研究者は存在し、代表的なものとしてCaseの“Feminism and Theatre”（1988年初版、2008年改訂版）が挙げられ、日本国内での演劇分析においても引用されているケースが多い。

2.4 大学における演劇及び演技の教育の研究

ここからはこれまでの大学における演劇又は演技の教育に関しての先行研究について述べる。前出の表1でキーワード検索された「大学」と「演劇」(G)の検索結果(205件)には、論文タイトルに「大学」が含まれるのではなく、論文ないし記事が掲載された大学の紀要等名称「〇〇大学紀要」というものなどが検索条件にヒットして検出されたものも多くあり、検索された数があるまま先行研究の数とは言い難い状況であるので、ここでは数値ではなく検出されたものを中心に（検出されなかったものも含め）これまでの先行研究の内容について検証する。

大学における演劇教育というと、「演劇的手法」を使った教育、つまりは演劇的手法による学習効果に関する研究（例：高尾、2010b）なのか、「演劇」を専門領域としてとして学ぶことなのかという点で分かれるが、今回は論文の主旨に沿う形で後者を取りあげる。

大学における専門教育としての演劇について論じた先行研究は大きく二つのカテゴリーに分けることができる。一つは、演劇を大学で学ぶことの意義を論じたもの（例：熊谷、2000）、二つ目は、カリキュラム体系や授業内容についてである（例：藤崎、2006及び菊川、2006）。その中でフェミニズム的視点からの考察や、学生のジェンダーを捉え、演劇と絡めた研究は私が検索した中では見つからなかった。2.3で述べた通り、演劇における演技とジェンダーの研究がほぼなされていない状況に加え、日本国内において、大学における演劇教育とジェンダーについての議論もほぼ展開されていない状況が明らかになった。それゆえ、演劇教育の中でも演技とジェンダーに特化した研究がなされていない現状も同時に浮かび上がってくる。

次に現在、教育研究の分野においては男女平等教育を考える上でジェンダーを考えることが必須となっているが、何故、未だ演劇専門教育における学生達のジェンダーは論じられていないのかを考えてみたい。これまで述べた通り、まだ日本において演劇そのものをジェンダーで読み解く試みが少ないことも影響していると推測できるが、まず教育という観点からは、そもそも演劇が大学で学問とし

て専門科目として扱われるようになったのには日が浅いということが挙げられる。1951年発行の演劇雑誌『悲劇喜劇』の「大学の演劇」という特集の中で、いわゆる学生演劇に関する記事があるがその中で、日本の大学において演劇学科がぼつぼつと表れているが、学問の世界では、文学の一部として、又は文学との関連においてのみ、学問的考察の対象であって、この時期ではまだ大学での演劇学がさほど確立していなかったことを示している¹⁰⁾。

演劇を専門とする学部ないし学科の創設は、「専門教育としての体系性に配慮された演劇教育機関として古いものは日本大学の専門部文科芸術学専攻における演劇部門で、これが一九二九年の設置¹¹⁾と熊谷(2000)が記述しているものがある。また玉川大学では1964年に文学部芸術学科演劇専攻が始まったとあり¹²⁾、大学で上演芸術である演劇が学問として、更には文学としてではなく実技と実演を兼ね備え、体系立った学部や学科として存在してきたのは日が浅く、またその大学の数も全国規模で見ると非常に少ないというのが現状である。こういった現状から、大学において、専門科目としての演劇に関して議論されているのは、カリキュラムや教育内容についてのことが大半を占めており、ジェンダーを絡めて考えるというところにまだ至っていないのではないかと推測できる。以上をまとめると、大学で文学や歴史としての演劇や、戯曲解釈ではない(前出『悲劇喜劇』(1951)の中で、戯曲史中心の講座を持つ大学はかなりあるとしている)舞台芸術としての、実技・実演を伴った演劇ないし演技が学問として誕生してから日が浅く、またその数が少ないことが、大学教育における演技とジェンダーという学際的な研究が今現在行われていない理由の一つとしていえるだろう。更には大学以前の教育において、演劇が教科・科目として扱われていないということも影響していると思われるが、それに関しては次にダンス／舞踊との比較の中で検証していく。

3. 先行研究概観2 (ダンス／舞踊との比較)

3.1 教育現場における演劇とダンス／舞踊の類似点・相違点

では次に、視点を演劇／演技からダンス／舞踊(以下、ダンスとする)に移して考えていく。何故ダンスにフォーカスを当てるかという点、演劇との類似点が多くあるからである。それは、第一に、演劇と同じく身体を使って表現する舞台芸術であること。第二に、演劇の中にも、芝居の中でダンスシーンが挿入されていることも多く、ミュージカルには、演技とダンスは同時に存在し、また演劇とダンスが融合したような作品¹³⁾が存在することが挙げられる。第三に、ダンスのジャンルにもよるが、クラシックバレエを例に挙げると、明確に役柄(キャラクター)がある作品も多くあり、王子、王女、少女、白鳥など役柄を踊って「演じる」ものがあること。このような点から演劇とダンスには類似性があり、今回演劇との比較対象としてダンスを取り上げる。

加え、本論の主題でもある演技の授業という点から見ると、演劇の演技を実技で学ぶ上で行う身体訓練の中には発声やセリフ回しだけでなく、ダンスやムーブメントも重要である点が挙げられる。また大学においても演劇を専門とする学部ないし学科はダンス／舞踊専攻が併設されていたり、演劇の学生向けのダンスの授業が行われていることも挙げられる¹⁴⁾。

しかし、一方で教育という側面から考えるとダンスは演劇と異なることがある。それは、現在、ダンスが大学入学以前の学校教育の中で授業として扱われているということである。更にジェンダーという観点では、特に平成20年の新学習指導要領改訂により、ダンスが中学校において男女必修化されたのをうけ、ダンスとジェンダーへの問題意識が高まり、ダンス教育とジェンダーに関する先行研究が演劇のそれより多く見られる。

またダンスは学校の中で「体育」の授業で取り扱われている¹⁵⁾が、「演技」の授業についても実は

体育の授業に近いということを指摘しておく必要がある。大学における演劇の研究ないし授業というと、文学として戯曲を学んだり、その歴史を学ぶ座学のスタイルがイメージされるかもしれないが、実技科目としての演技の授業は、実際身体を動かして表現することが主であり、身体訓練（ストレッチ・筋肉トレーニング）・発声練習・リズム運動・床運動・インプロビゼーションなど、私服から稽古着に着替え、時には裸足になって行うこともあり、大声を出したり、走り回ったり、踊ったり、全身を使って表現するものである¹⁶⁾。この演技の授業の内容から見ても、演技の授業はダンスや体育にかなり近いものである。このことは熊谷（2007）も大学以前の学校教育における演劇についてであるが以下のように述べている。

演劇の授業のありようは、既存教科・科目のなかで何に近いかとなると、芸術系の科目あるいは国語などより、体育なのではないだろうか。もちろん、演劇の授業がどのようなものであるか、すなわちそのカリキュラムによるわけだが、昨今の趨勢でみるならば、それは基本的に「からだを使う、動く」授業である。そのため、生徒の服装はどちらかというと動きにくい制服より体操服のほうが、授業の場所もどちらかというと一般の教室などよりは体育館のほうが、それぞれ望ましい¹⁷⁾。

しかし、熊谷は、上記のように体育と似ているとしつつも、演劇との決定的な違いは、体育には学習指導要領にカリキュラムの基準が存在することだと述べている¹⁸⁾。すなわち、身体を使って「表現する」というところでかなり近い関係にあるといえる演技とダンスであるが、教育現場における双方の決定的な違いは、「大学以前の教育に教科あるいは科目として体系だった基準のもとに指導されてきたか否か」という点である。

更に、ジェンダーとダンスという観点から見ると、猪崎、水村（九埜）、米谷（2010）ら曰く、ダンスが男女共修授業となる（なった（筆者追記））ことで、舞踊研究としてのジェンダー表現に関する研究に対して教育現場から要請の声があがっているとし、こういった現状から「男らしさや女らしさとは何かを考えるジェンダー教育のプログラム策定の根拠となる実証的で体系的な舞踊研究が求められている」と述べている¹⁹⁾。ダンスという体を使った表現方法に対し、ジェンダーがどのように影響しているのか、するのか、そして教育現場ではそれに対してどのような教育プログラムを展開する必要があるのかという視点からの研究は、前述した通り、未着手である演技の教育におけるジェンダーを考える上で非常に参考になる取り組みである。

3.2 ダンス及びダンス教育におけるジェンダーの研究と演劇（演技）への応用検討

ダンスにおけるセクシュアリティの研究については、Hanna（2010）が様々な分野からのアプローチを紹介しまとめ解説しているものがある。その中で実際の動きについて分析するDance Theoryを用いた研究にはLaban MovementとEffort Shape analysesがあるというが、Hanna（2010）曰く、ダンスとセクシュアリティの研究においてこのようなmovement analysisを使ったものは少ないという。理由として研究者がこういった実技的なトレーニングを受けていないことと研究の対象がダンスに関わる人間と社会的コンテクストにあるからだだと分析している²⁰⁾。例えば、今後演劇の「演技」の「動き」という実技的側面に特化した分析をするのであれば、このmovement analysisを使用したダンスの分析も参考になると考えられる。また日本においては、猪崎（2004、2006）が舞踊運動の評価尺度の研究や、それをういて猪崎、水村（九埜）（2009）が日本舞踊における女らしさの表現について分析しており、演技の「動き」を分析するには参考となる研究方法である。

ダンスと教育について、日本においては安則（2008）が舞踊研究の動向をまとめており、その中で、舞踊教育が舞踊研究の中心的位置を確保してきたと述べている²¹⁾。次に、ダンスの中でも教育におけるジェンダーについての先行研究において、木場（2013）は学校ダンスの歴史において女子のものと考えられていたダンスが時代と共に男子にも履修が望まれるようになって現在に至るとある。つまり学校ダンスにおいては、まず対象としては女子が先にイメージされ、時代に合わせて男子も参加対象となり、現在のダンス男女必修化につながるものと捉えられる²²⁾。木場は、学校ダンスが「女子供のするもの」だったのが「男もするもの」になり、更に「性差を含む個人差」から「性差ではなく個人差」という変化を遂げてきたとしている。勿論、ダンスと演劇は相違点も多い。その成り立ちや、担い手、観客、歴史的な立ち位置など演劇とダンスには相違点も多くあり、一概に全て演劇とダンスを等しく考えることはできないが、同じ「身体表現」としての舞台芸術であること、大学の専門科目として実技を伴い存在するという類似点においては比較するに値すると考えられる。

大学におけるダンスとジェンダーという点では、例えば、宮本、島内（2010）の研究ではコンテンポラリーダンサーの動きの「男らしさ」「女らしさ」の分析を行うと同時に、その観照者となり、「男らしさ」「女らしさ」をカテゴライズした大学生の意識も示されている。また猪崎、永田、酒向（2012）の「大学生はダンスにおける『男らしさ』『女らしさ』をどのように捉えているか—質問紙調査に基づく検討—」において、今まで体育やダンスとジェンダーの研究や、ダンスに対するイメージの報告はあるが、ダンスにおける「男らしさ」「女らしさ」のイメージについて調べたものは見当たらないとして、大学生のダンスにおけるイメージ調査をしている²³⁾。演劇においては、演劇とジェンダーに関する研究の数そのものさえ多くない現状だが、演劇を専門科目として指導する際には、このようにそもそも学生達の演劇に対するジェンダー・イメージを把握する必要があるのではないか。その理由としては、まさに猪崎らがこの調査をした次の理由、ジェンダー・イメージを知ることにより、

ダンスにおけるジェンダー・イメージやジェンダー・バイアスへの気づきや学びは、ダンスを学ぶ大学生のための教育プログラムの開発においてのみならず、中学校段階のダンス教育の検討においても重要な手がかりになり得る²⁴⁾。

という視点であり、これは演劇教育にも当てはまり、まずは「気づく」ことから、教育プログラムの再考が可能であると考えられる。

4. まとめ

結論の前に一点、演劇の中の演技は「キャラクター（登場人物）を演じる」という大前提があるので、演技や演劇にジェンダーやフェミニズムの視点を取り入れることにより、やみくもに「与えられた性別役割」に警鐘を鳴らし、否定するのでは芝居が成り立たないのではないかとということも脳裏に浮かぶ。例えるならば、「男性を性的に魅了し、肉体的にセクシーな女性」という役柄があった際、「そういったジェンダー規範で縛られ、男性視線で描かれた女性像を演じることはやめよう」という早急な結論を呼び起こすのではないということを念頭に置きたい。

このような問いかけには、猪崎ら（2010）が日本舞踊を取り上げたジェンダーフリーなダンス教育プログラムについて述べている意見が、演技においても参考にできる。日本舞踊の「男踊り」「女踊り」と明確に男女差がある踊りが何故ジェンダーフリーなダンス教育になるのかという点を鋭く突いているからだ。それは男女の踊り手共に男踊り、女踊りを踊っていること、更にその表現の特性を理解す

ることを通して、「身体としてのジェンダーと身体表現としてのジェンダーとを対置させる状況を作り、その中で中学生の男女がジェンダーから捉える身体表現を学ぶ場を作り出していかねばならない」²⁵⁾としている。これは演技においても同様なことがいえるのではないか。更に「演技」を専門に学ぶ上においてはこのような身体におけるジェンダー構造を知ること、演技のテクニクにもつながっていくのではないだろうか。

以上を踏まえ、まとめると、第一に、演劇及び演技におけるフェミニズム及びジェンダー的視点からの研究が相対的に少ない現状が明らかになった。今後この分野の研究が期待されるといえるだろう。この点に関して、更なる展開としてHanna (2010) が記載している、ダンスにおけるqueer theory²⁶⁾を基にした研究・分析について触れておく。queer theoryでは「違い」ということを重要視している。今回は紙面上、このqueer theoryに関しては割愛したが、ジェンダーという視点で考える時、queer theoryを基にした研究も行うことでより演技や、学生のバックグラウンドに対して多角的な見方と客観的なアプローチが可能ではないだろうか。第二に、大学における演劇及び演技の教育におけるジェンダーについての研究がなされていないことが明らかになった。今後この課題への取り組み方に関しては本論で述べた通り、大学生とダンス教育におけるの先行研究が参考になる。それを踏まえて、「演技」の授業のプログラムをジェンダーという視点からひもとき、再構築できるのではないか。以上、今回は演劇及び演劇教育とジェンダーについての先行研究分析、更にダンス教育とジェンダーの研究と比較することにより、現在の大学における演技の授業におけるジェンダーの研究課題、そしてダンス教育との比較から、その研究方法の道しるべが明らかになった。今後この課題に臨み、大学の専門実技科目としての演技の授業におけるジェンダーを意識したプログラム作りにつなげていきたい。

謝辞

本研究は、JSPS科研費25870742の助成を受けたものである。

注

- 1) 「キャラ」に関しては以下を参考：土井隆義『キャラ化する/される子どもたち 排除型社会における新たな人間像 岩波ブックレット759』岩波書店、2009年。及び、伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド—ひらかれたマンガ表現論へ』NTT出版、2005年、94-97頁。
- 2) 「隠れたカリキュラム」とは、暗黙のうちに学校で教えられるルールや規範のことで、「男らしさ」「女らしさ」を知らず知らずのうちに子供たちに教えていること（例：女子に自己抑制や従順さを説き、男子に主体性や積極性を促すなど）。以下を参考：加藤秀一「教育とジェンダー③隠れたカリキュラム」『図解雑学 ジェンダー』加藤秀一、石田仁、海老原暁子著、ナツメ社、2005年、40頁。及び、中西祐子「かくれたカリキュラム」『ジェンダー論をつかむ』千田有紀、中西祐子、青山薫著、有斐閣、2013年、91-97頁。及び、木村涼子「隠れたカリキュラム」『岩波 女性学事典』井上輝子他編、岩波書店、2002年、68-69頁。
- 3) 以下を参考：井谷恵子「学校体育とジェンダー」『ジェンダーで考える教育の現在 フェミニズム教育学をめざして』木村涼子、古久保さくら編著、解放出版社、2008年、42-59頁。
- 4) 以下を参考：中西祐子、前掲書、94-95頁。及び、土井隆義、前掲書、11頁。
- 5) フェミニズムや、ジェンダーの視点から、古典戯曲を分析し、それらを「フェミニズム演劇と呼べるだろう」と今現代から過去に向かって名付けることはできるが、作品の創作当時から「フェミニズム」という言葉と概念を意識的に取り入れた作品の誕生は「フェミニズム」という言葉とその定義が誕生した以降

と今回は考えることとする。

- 6) 安則貴香「舞踊研究の動向と課題—高等教育機関発行雑誌における舞踊関連論文の分析を中心として—」『専修大学社会体育研究所報』専修大学社会体育研究所、56巻、2008年、17-29頁。 <http://id.nii.ac.jp/1015/00001839/> (参照、2015-11-27) における調査方法を参考にして行った。
- 7) 与那覇晶子「フェミニズム論から見る沖縄演劇—組踊『忠孝婦人』を中心に—」『地域研究』沖縄大学地域研究所、13号、2014年、97頁。 <http://okinawa-repo.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/okinawa/12024>、(参照、2015-11-20)
- 8) Anan, Nobuko “Identity Politics in Women’s Performance in Japan” *Theatre Research International*, Vol. 37, Issue01, 2012, pp. 68-70. <http://dx.doi.org/10.1017/S0307883311000782> (参照、2015-11-04) では、劇団「毛皮族」等の事例を挙げフェミニズムの視点から論考している。
- 9) Anan, Nobuko *Contemporary Japanese Women’s Theatre and Visual Arts: Performing Girls’ Aesthetics*, Hampshire, Palgrave Macmillan, 2016, pp. 41-42.
- 10) 「特集 大学の演劇 日本・スイス・ドイツ・アメリカ」『悲劇喜劇』早川書房、5巻7号、1951年、10頁。
- 11) 熊谷保宏「大学における演劇の学び：混雑したディシプリンの交差点をどう見るか」『日本大学芸術学部紀要』日本大学、32号、2000年、77頁。 [http://ci.nii.ac.jp/els/110006178004.pdf? id = ART0008149060&type = pdf&lang = jp&host = cinii&order_no = &ppv_type = 0&lang_sw = &no = 1450071155&cp](http://ci.nii.ac.jp/els/110006178004.pdf?id=ART0008149060&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1450071155&cp) (参照、2015-10-05)。
- 12) 今尾哲也「演劇専攻」『玉川学園五十年史』玉川学園、1980年、624頁。
- 13) フィジカル・シアターなど。
- 14) 例として、2015年現在の玉川大学芸術学部パフォーマンス・アーツ学科では、入学時には演劇・舞踊はコース別にはなっておらず、演劇と舞踊の行き来や選択ができるようになっている。
- 15) 中学校学習指導要領の「保健体育」の内容の欄にダンスが記されている。文部科学省 平成20年3月平成22年11月一部改正 「中学校学習指導要領」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/_icsFiles/afieldfile/2010/12/16/121504.pdf (参照、2016-01-21)
- 16) 演技のウォーミング・アップやエクササイズ、服装に関しては、以下を参考：ペリー、J. 著、太宰久夫監訳、野呂香、松村悠実子訳『演劇入門ブック ビジュアルで見る演技法』玉川大学出版部、2014年。
- 17) 熊谷保宏「演劇の教科書あるいはカリキュラム問題について」『演劇総合研究』日本大学芸術学部、19号、2007年、4頁。
- 18) 同上、4頁。
- 19) 猪崎弥生、水村（九埜）真由美、米谷淳「日本舞踊家のジェンダー表現—ジェンダーフリーなダンス教育プログラムを考える」『表現文化研究』神戸大学表現文化研究会、9巻2号、2010年、120頁。 http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81002906 (参照、2015-09-17)
- 20) Hanna, Judith L. “Dance and Sexuality: Many Moves” *The Journal of Sex Research*, Vol. 47, Issue2-3, 2010, p. 214. <http://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/00224491003599744> (参照、2015-11-04)
- 21) 安則、前掲書、23頁。
- 22) 岡田純子によると、玉川学園では、明治以後の学校舞踊の中に男の子が喜んでやれるものがなかったので、民族舞踊を手がかりとして男の子のための男の子らしい踊りをはじめ、男子の学校舞踊を成功させたという記録もある。岡田陽、岡田純子『演劇と舞踊—玉川教育—』玉川大学出版部、1964年、153頁。
- 23) 猪崎弥生、永田麻里子、酒向治子「大学生はダンスにおける『男らしさ』『女らしさ』をどのように捉えているか—質問紙調査に基づく検討—」『スポーツとジェンダー研究』日本スポーツとジェンダー研究会、10巻、2012年、17頁。

- 24) 猪崎ら、同上、20頁.
- 25) 猪崎ら (2010)、126頁.
- 26) Hanna (2010)、p. 218.

参考・引用文献

- Anan, Nobuko “Identity Politics in Women’s Performance in Japan” *Theatre Research International*, Vol. 37, Issue01, 2012, pp. 68–70. <http://dx.doi.org/10.1017/S0307883311000782> (参照、2015–11–04)
- Anan, Nobuko *Contemporary Japanese Women’s Theatre and Visual Arts: Performing Girls’ Aesthetics*, Hampshire, Palgrave Macmillan, 2016.
- Case, Sue-Ellen *Feminism and Theatre Reissued Edition*, Hampshire, Palgrave Macmillan, 2008.
- 藤崎周平「演劇の『専門』学科における『基礎』教育をめぐる問題」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』日本演劇学会、44号、2006年、65–85頁.
- Hanna, Judith L. “Dance and Sexuality: Many Moves” *The Journal of Sex Research*, Vol. 47, Issue2–3, 2010, pp. 212–241. <http://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/00224491003599744> (参照、2015–11–04)
- 今尾哲也「演劇専攻」『玉川学園五十年史』玉川学園、1980年、624–630頁.
- 猪崎弥生「舞踊運動の表現性評価のための評定用語の設定とその妥当性の検討」『表現文化研究』神戸大学表現文化研究会、4巻1号、2004年、27–40頁. http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81002849 (参照、2015–09–02)
- 猪崎弥生「舞踊教育における『見る』に関する実証的研究」神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文、2006年.
- 猪崎弥生、水村（九埜）真由美「日本舞踊における女らしさの表現—印象評価実験に基づいて」『表現文化研究』神戸大学表現文化研究会、8巻2号、2009年、77–83頁. http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81002893 (参照、2015–08–21)
- 猪崎弥生、水村（九埜）真由美、米谷淳「日本舞踊家のジェンダー表現—ジェンダーフリーなダンス教育プログラムを考える」『表現文化研究』神戸大学表現文化研究会、9巻2号、2010年、119–128頁. http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81002906 (参照、2015–09–17)
- 猪崎弥生、永田麻里子、酒向治子「大学生はダンスにおける『男らしさ』『女らしさ』をどのように捉えているか—質問紙調査に基づく検討—」『スポーツとジェンダー研究』日本スポーツとジェンダー研究会、10巻、2012年、16–22頁.
- 加野彩子「サロメがみせるもの：日本近代演劇における視覚性とジェンダー」『イメージ&ジェンダー』イメージ&ジェンダー研究会、1巻、1999年、25–35頁.
- 木場裕紀「学校ダンスとジェンダー観に関する言説の歴史の変容—体育専門雑誌の言説分析から—」『舞踊学』舞踊学会、36号、2013年、31–40頁.
- 菊川徳之助「序説・大学における演劇教育研究」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』日本演劇学会、44号、2006年、3–24頁.
- 熊谷保宏「大学における演劇の学び：混雑したディシプリンの交差点をどう見るか」『日本大学芸術学部紀要』日本大学、32号、2000年、73–92頁. http://ci.nii.ac.jp/els/110006178004.pdf?id=ART0008149060&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1450071155&cp= (参照、2015–10–05)
- 熊谷保宏「演劇の教科書あるいはカリキュラム問題について」『演劇総合研究』日本大学芸術学部、19号、

2007年、1-8頁.

松村悠実子「演技の授業におけるジェンダーの影響を考える—日常の「かわいい」キャラと演劇のキャラクターという演技の二重構造についての考察—」『芸術研究 玉川大学芸術学部研究紀要2013』玉川大学芸術学部、5巻、2014年、9-15頁.

宮本可奈子、島内敏子「コンテンポラリー・ダンスにおけるジェンダー・ステレオタイプの研究—舞踊家のとらえる『男らしさ』『女らしさ』の表現比較を中心に—」『日本女子体育大学スポーツトレーニングセンター紀要』日本女子体育大学スポーツトレーニングセンター、13号、2010年、1-9頁.

森川麗子「現代イギリス演劇と『言葉、言葉、言葉』(6)—フェミニズム批評試論(1)—」『椋山女学園大学研究論集』椋山女学園大学、18号(1部)、1987年、31-39頁.

柴山麻妃「ジェンダーの政治学：アメリカにおけるフェミニズムとレズビアン演劇」『比較社会文化研究』九州大学、1号、1997年、57-64頁.

「小特集・フェミニズム劇の現在」『シアトロ7月号』シアトロ、557号、1989年、50-68頁.

高尾隆「演劇教育研究の方法論の現在—演劇教育研究の質的方法化と質的研究のパフォーマンス化の接点で」『演劇学論集 演劇学論集紀要』日本演劇学会、50号、2010a年、61-77頁.

高尾隆「大学生のコミュニケーションとインプロ授業の可能性」『教育3月号』国土社、60巻3号、2010b年、23-30頁.

「特集 大学の演劇 日本・スイス・ドイツ・アメリカ」『悲劇喜劇』早川書房、5巻7号、1951年、2-20頁.

「特集 日本の女性劇作家」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』日本演劇学会、43号、2005年、3-223頁.

安則貴香「舞踊研究の動向と課題—高等教育機関発行雑誌における舞踊関連論文の分析を中心として—」『専修大学社会体育研究所報』専修大学社会体育研究所、56巻、2008年、17-29頁. <http://id.nii.ac.jp/1015/00001839/> (参照、2015-11-27)

与那覇晶子「フェミニズム論から見る沖縄演劇—組踊『忠孝婦人』を中心に—」『地域研究』沖縄大学地域研究所、13号、2014年、95-118頁. <http://okinawa-repo.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/okinawa/12024> (参照、2015-11-20)